

質疑応答 (要旨)

ご理解いただきやすいように表現の変更や加筆・修正を行っている箇所があります。

Q： 第 3 四半期における受注高が非常に強かった印象です。多くのセグメントで強く伸びていますが、それぞれ何か大型案件の受注が入ったのか等について教えてください。大型案件の反動減のあった上期と比べて、受注環境は上向き基調にあるということなのでしょうか。

A： 第 3 四半期累計でも運用を中心として積み上げることができ、開発の反動減影響等をカバーして全体受注高・受注残高とも良好な状態だったと評価していますが、第 3 四半期の増加についてセグメント別に主な要因をご説明します。まず、オフリングサービスは、運用・販売において連結子会社化した日本 ICS の影響で約 19 億円の増加及び海外子会社の MFEC で約 19 億円の増加があり、開発においては決済や経営管理の分野で合わせて約 10 億円の増加がありました。金融 IT は、開発においてカード系の根幹顧客で約 15 億円増加、公共系金融機関の新規受注で約 15 億円増加したほか、銀行系も好調でした。産業 IT も ERP 関連で約 5 億円の増加、根幹先顧客を中心に 2 億円から 3 億円の増加等、開発が全体として積み上がりました。広域 IT は、開発は若干マイナスでしたが、運用・販売が医療系やネットワーク系で積み上がりました。

また、受注環境について、上期は大型案件の反動減という個別要素が大きく出たためどうしても弱く見えていたところはあったと思いますが、全体としてはもともと当期も良好だと思っておりますし、だからこそ第 3 四半期では事業毎に受注高を積み上げることができたと考えています。

Q： 粗利率と大型案件の関係について教えてください。金融系大型案件のピークアウトは、一つがこの第 3 四半期から、もう一つが第 4 四半期から始まる状況だと思っておりますが、この影響は期初計画時点の想定通りということでしょうか。また、第 3 四半期の粗利率は大型案件の反動が出てくる中で上がりにくくなっているように見えます。今後も同様に、粗利率の改善が難しくなってくると見たほうが良いのでしょうか。

A： 大型案件のピークアウトによる影響については、概ね期初計画時の想定通りに推移しています。これは開発プロジェクト自体が想定通りに進んでいるということの裏返しだと思っております。粗利率の水準は、これまでの継続的な向上に伴って改善のハードルが少しずつ上がっており、加えて当社やパートナー企業の人件費上昇もあって上がりにくい状況ではありますが、さらに収益性改善を進めていきたいという意向は変わっていません。第 2 四半期から日本 ICS の寄与もありましたが、サービス型にシフトしていくことで成果を出していきたいと考えています。

Q： 来期に向けて大型案件の反動減を吸収できるような案件の仕込みや新しい見通しが立つ等、この 3 か月の間に変化はあったのでしょうか。

A： 先ほどご説明した通り、この第 3 四半期では、特定の案件ではなく様々な案件を積み上げることで開発受注高を伸ばし、大型案件の反動減を打ち返してきています。例えば、産業 IT では製造業向けに ERP 関連の領域が堅調ですし、広域 IT では中堅・中小企業の IT 投資の力強さを取り込んでいます。第 4 四半期も各セグメントで受注高をしっかり積み上げることで、来期のスタートを確かなものにしていきたいと考えています。

Q： 当期は積極的に人材投資を行い、報酬水準を引き上げたことは非常によい取り組みだと思っております。来期も同様の方向だとは思いますが、来期の人材投資は当期と比べてどの程度の水準・規模で行おうと考えているのでしょうか。また、人材投資以外の投資について、来期に向けて何か決まっているものがあれば教えてください。

A： まず人材投資についてです。1 年前にご説明した通り、当期は、報酬水準をしっかりと引き上げるためにグループ全体で年間約 50 億円の人材投資強化を行うこととしており、TIS 単体でみると、従前の 2%から 3%程度の段階的な報酬水準を引き上げに対して、当期は平均 6%の基本給引き上げを実施しています。来期については、今のところ当期のようにぐっと引き上げというよりもそれ以前と同等の水準、いわば通常通りの賃上げが必要であるという感触で計画しています。次に人材投資以外の投資についてですが、引き続き成長投資をしっかりとしていくという考え方は変わっていません。但し、来期業績に大きな影響を与えるような投資があるかという観点で言えば、現時点ではご心配いただくようなことはないかなと思っております。また、投資の金額及び投資で得られる効果等については、来期計画の中でしっかりとお示しできればと考えています。

Q： クレジット SaaS の商談状況に変化が出てきたかどうかを教えてください。

A： 昨年 12 月の事業説明会（ペイメント事業）でご説明した状況から大きく変わっていません。鋭意営業活動をしています。皆様と成果が共有できるよう引き続き取り組んでまいります。

Q： 本日、T o S T N e T - 3 による自己株式の取得を発表されましたが、今回売却される事業法人株主以外に、TIS 株式を政策保有している事業法人株主はどの程度いるのでしょうか。今回のような大きなインパクトはあまり考えなくてもよさそうでしょうか。

A： 先方から売却の申し出を受ける可能性について当社は言及できませんが、残高からすればそれほど大きなインパクトが一度に生じることはないかとみています。なお、当社としては引き続き政策保有株式の縮減に向けた対応を進めてまいります。

Q： 第 3 四半期の決算について、上期の状況から受注高等を心配していたのですが、非常に強い着地でした。受注高、売上高及び営業利益は社内想定と比べてどうだったのでしょうか。また、通期計画の達成確度が高まっている印象ですが、どのように捉えていますか。今回、通期計画を据え置いたのは第 4 四半期に計画外の来期に向けた投資を予定されているからなのでしょうか。

A： 第 3 四半期は、受注高、売上高及び営業利益ともに想定より若干良かったと評価しており、第 3 四半期としては結果が出せたと考えています。但し、第 4 四半期に向けては、受注高の積み上げが必要という認識であるため、決して楽観視はしていません。コストコントロールも含めて計画達成に向けて着実に対応してまいります。すでにご案内の通り、前年同期に公共系金融機関の一括受注約 50 億円が入っていたことから反動減の影響がまだ残っているのですが、先ほど申し上げたように、ERP 領域や中堅・中小企業の IT 投資の取り込み等の明るい材料もありますし、受注環境も全般的に大丈夫だと思っていますので、引き続き気を引き締めて受注高を積み上げることで、通期計画の達成と次の計画のマスタープラン作りをしっかりと行っていきたいと思っています。

以 上